

一丁目一番地は学舎整備

■ はじめに

次期学長選考にあたり、私・塚本康浩を実名・捺印入りで推薦して下さった教授の皆様、心より御礼申し上げます。そして、学長としての6年間を支えて下さった全ての教職員・学生・卒業生・関係者の皆さまに、あらためて深く感謝いたします。

本学が130年にわたり培ってきた学風を受け継ぎ、それを一層発展させていくことが、私に課せられた使命であると自覚しております。大学である以上、教育と地域貢献はもちろんのこと、研究力を一段と強化し、国際的にも貢献する成果を挙げていくべきだと考えております。一方で、少子化や財政難など多くの外的要因により、京都の大学間にも競争の風が強く吹き始めています。このような状況の中で、本学を「地域に深く根ざし、世界に誇れる研究と教育の拠点」へと押し上げるべく、今後3年間で成し遂げたい所信を述べさせていただきます。とりわけ、①安全で魅力ある学舎整備、②大学改革とDX推進による学びと働き方の刷新、③研究力と大学経営を新たなステージへ引き上げること、を「第三期の三本柱」と位置づけ、必ずやり切る覚悟で臨みます。

■ 一丁目一番地：学舎整備

本学の老朽化した学舎・研究インフラは、学生・教職員、そしてキャンパスを利用する全ての人が望む「最優先課題」です。これまで私は、京都府と精力的に協議を重ね、学舎整備計画や体育館・グラウンド整備検討費の予算化等を進めてまいりました。次期任期は、この施設整備を「予算獲得を含め確実に実現し、可及的速やかに完遂するための総仕上げの任期」と位置づけています。そのために、学長として全力でこの課題に集中します。その実現には、管理職のみならず、全教職員の理解と協力、そして学生の声も踏まえた合意形成が不可欠です。ここに、改めて皆様のお力添えを強くお願い申し上げます。

■ 大学改革の深化と学生支援体制の強化

この6年間で、学部・学科再編の実現、社会科学部設置、京都府立農芸高校・北桑田高校の系属化、財務改善計画など、皆様とともに大きな改革を短期間で前進させてきました。しかしながら、安定した教育研究体制の構築には、学生定員増、事務局体制の再構築、予算配分の適正化が不可欠であり、これらを速やかに実行します。同時に、本法人の資産拡大や他大学との連携（状況に応じて本学への吸収統合も含め）は、京都府や関係機関と十分に協議しながら、大学規模と運営基盤の強化を慎重かつ大胆に検討していきます。学生支援についても、経済的支援や学修支援の充実に加えキャリア形成・メンタルヘルス支援など、多面的なサポート体制を整備し、学生一人ひとりがこの大学で学んで良かった」と実感できる環境づくりを進めます。

■ 研究力の向上と成果還元

基礎・応用・社会実装の各段階で、教員一人ひとりの「得意」が最大限尊重されるよう、予算配分、人員配置、業績評価の見直し（分野特性を踏まえた定性的および数値評価）を進めます。その際、人文社会・自然科学研究など多様な研究スタイルを尊重しつつ、透明性の高い評価制度を構築します。大型資金獲得者（間接経費高額納付者）への敬意と支援を明確に打ち出し、国内外の大学・企業・行政との連携を一層拡大し、「府大発イノベーション」を強力に推進します。また、起業を志す学生が増えるよう、アントレプレナーシップ教育を体系的に整備し、「研究成果を社会に届ける力」を育成していきます。

■ 大学経営の改善と将来戦略の確立

大学改革など教職員の不断の努力により、本学の財務状況は近い将来、健全化が見込まれています。今こそ、法人そして大学の在り方を根本から見直すべき時期にきています。「教育研究力は本当に向上したのか」「優秀な人材を社会に送り出せているのか」「ガバナンスと透明性は十分か」「府民に頼られる大学になっているのか」「一法人二大学体制は最適なのか」、こうした問いを、データと現場の声の両面から俯瞰的に検証し、将来戦略を皆様と共に策定します。そのためにも、教育・研究・地域貢献に加え、京都府との折衝力・発信力、そして政治力・調整力を

高めることこそが、学長の重要な役割であると考えています。私は、これまで培ってきた行政・政財界とのネットワークを活かし、本学のプレゼンス向上と戦略的な大学経営に一層努めてまいります。

■ 研究科長・学部長の権限と責任の明確化・強化

分野別認証評価に備え、各セグメントの教育・研究・社会貢献・財務状況などを詳細に把握・点検し、改善につなげるとともに、将来的な発展に向けた施策を研究科長・学部長のガバナンスのもとで着実に遂行していきます。

■ 少子化への対応・国際化推進・DX/AI活用・環境変化への対応

受験生や周辺大学の動向を分析しながら、戦略的入試広報を強化し、入試方法を見直していきます。京都府内だけでなく、府外や海外からも受験しやすい仕組みに改善します。そのうえで、受験生にとって本当に魅力ある京都府立大学となるためには、「お洒落で機能的な学舎整備」が何より重要だと考えています。DX推進は、もはや後戻りのできない改革です。新しいシステム導入やAI活用に不安や戸惑いがあることも承知していますが、教職員の業務を軽くし、学生サービスの質を高めるため、DX担当副学長が中心となって、事務処理の自動化・効率化を進めます。教育・研究の面でも、教務部長や研究担当副学長と連携し、講義のあり方や研究室配置も含めて、DX・AIを前提とした見直しを進めます。国際化については、国際センターを中心に、単位互換や授業料免除枠の拡充、留学生の受入と派遣の促進を図り、学生と教職員の国際経験の機会を広げます。さらに、附属演習林を活かし、CO₂固定や生態系保全など気候変動に関する研究を進め、全国有数の環境研究拠点を目指します。新自然史科学創生センター、京の防災防疫安全安心研究センター、ゼロカーボンキャンパス推進センターなどにも予算措置をし、気候変動や災害への学術的貢献を強めていきます。

■ 京都府公立大学法人の副理事長として

厳しい財政状況の中にありながら、法人副理事長として、自身が有する財界とのネットワークや起業家としての経験・ノウハウを最大限に活かし、京都府との緊密な協働のもと、引き続き、より魅力ある大学法人へと成長させていきたいと考えています。あわせて、法人そのものの在り方についても根本から問い直し、必要な改革を積極的に提起し、実現化していく所存です。

■ 誠実な情報共有と責任ある大学運営

これまで私は、行政・政財界との協働、高校の系属化の推進、学生部長として学生の声に耳を傾ける現場主義の運営を重ねてきたつもりです。もちろん、多様な意見や反論があることは当然であり、むしろ健全な大学の証でもあります。今後も、可能な限り情報共有に努め、判断や施策に誤りがあれば真摯にお詫びし、学長として責任を負う覚悟です。そして第三期は、次の世代に確実にタスキを渡すための「準備と仕上げの期間」でもあります。各種行政手続きには時間を要しますが、これまでと同様に、全力で迅速に新生・京都府立大学の熟成のために働き続けます。学生と教職員の信頼関係を基盤として、学内における適切な飲酒の在り方についても、学生の安全確保を最優先に据えつつ、皆様と改めて議論したいと考えています。

■ おわりに

学長でありながら講義や研究を続けることができ、さらにキャンパス内でダチョウやエミューを飼うことも黙認していただいている京都府立大学の寛容さに、心から感謝しています。泣いても笑っても、第三期が最後の任期です。府立大学の黒字化を令和9年度、そして、学舎・体育館講堂の整備着工は基本計画・設計を経て任期末までにスタートさせる考えです。大学の主役はやはり学生です。さらなる良い教育を目指し、良い研究成果が生まれることを期待しています。ダチョウさんとともに本学を去るその日まで、教職員そして学生の皆さんと力を合わせ、「唯一無二の京都府立大学」の魅力と実力をさらに高めていきたいと考えております。

